

特筆すべき教育・研究・診療・社会貢献活動等への取組と成果、世界的位置付けなど。

(※評価年次報告「卓越した教育研究大学へ向けて」で報告する内容)

<特筆すべき教育活動>

(1) グローバルCOEプログラム「社会階層と不平等教育研究拠点の世界的展開」では公募によりCOE大学院生を採用し、正副アドバイザーによる複眼的指導を行うとともに、英語による国際的発信力の涵養を重視し、「世界で活躍する、タフで独創的な人材」を育成している。平成22年度は、その一環として「東北大学・米国スタンフォード大学サマースクール」を開催し、米国スタンフォード大学貧困と不平等研究センターにおいて院生が博士論文に関する研究報告を行った。

(2) 大学院生の研究スキルを高め、学際的視野を養うため、大学院GP「歴史資源アーカイブ国際高度学芸員養成計画」では、国際的発信力を持ったキュレーター・アーキビストを育成することを目的とし、文学研究科の有する歴史資源のアーカイブ化のためのデジタル画像の作成、海外研修などを通して、大学院生を共同研究プロジェクトに参加させている。

(3) 文学研究科では、大学院生の研究マネジメント能力や発信力を高めるため、授業以外に研究会やワークショップ等において研究発表を行う機会を増やし、またその企画運営に参加する機会を積極的に設けている。協力講座と連携分野を除く全25の専攻分野が1つ以上の学会事務局の運営や研究会の主催団体となっており、活発な学会活動を展開して大学院生に刺激を与えている。

(4) 平成21年度から、独立行政法人国際交流基金との業務提携に基づき、日本語教育学研究室の学部学生・大学院生を海外の大学に派遣し、日本語授業の見学や実施に当たる短期の海外日本語インターンシップ・プログラムを開始した。国内での実習に海外での体験を積み重ねることにより、井上プランの描く国際的視点から思考できる人材の育成に取り組んでいる。

<特筆すべき研究活動>

(1) 社会学の吉原教授は、サントリー文化財団、トヨタ財団、JFE21世紀財団などから研究助成を受け、グローバル化に伴う人の移動とこれに伴うコミュニティの変容を、主に東南アジアをフィールドに精力的に研究を進め、「国策移民」とか「企業移民」とは異なる「ライフスタイル移民」や「文化移民」など、新しい移民現象の叢生が近年顕著であることを明らかにした。その成果は、平成21年度に『変わるバリ、変わらないバリ』（勉誠出版）、『都市社会計画の思想と展開』（東信堂）などの著作として公刊され、関連分野に大きな影響を与えている。

(2) 我が国における生成文法論研究の第一人者である英語学の金子教授は、英語助動詞システムをめぐる統語論、意味論、および語用論のインターフェースの諸特性の解明に取り組んでいるが、継続的に科学研究費を取得してこの研究を深化・発展させ、平成21年度は、その成果をまとめた著作『英語助動詞システムの諸相：統語論・意味論インターフェース研究』（開拓社）を出版した。独創的な理論と高い応用可能性を示唆した本書は高い評価を受け、この分野において最も古く権威のある市川賞を受賞した。

(3) 心理学の行場教授は、東北大学電気通信研究所との共同研究プロジェクトである特別推進研究「マルチモーダル感覚情報の時空間統合」において、物体の動きの見え方に音が強い影響を与えることを世界に先駆けて発見したが、その成果は国際的学術誌『Public Library of Science ONE』に掲載されるとともに、平成21～22年度にかけて新聞各紙やTVなどで報道された。本研究成果は、現在、産業界が鎬をけずっている高臨場感マルチメディア技術の開発に貢献する重要な発見として、世界的に注目されている。

(4)上で触れたもの以外にも、文学研究科の教員は多くの著作の刊行によって研究成果の社会還元を進めてきた。日本史・大藤教授『仙台・江戸叢書13：仙台藩の学問と教育』（大崎八幡宮刊）及び『検証イールズ事件』（清文堂出版）、ヨーロッパ史・佐藤勝則教授『比較連邦制史研究』（多賀出版）、社会学・正村教授『グローバリゼーション』（有斐閣）、東洋日本美術史・長岡教授『日本の仏像』（中公新書）、心理学・仁平教授『防災の心理学』（東信堂）、哲学・座小田教授『フイヒテ全集第21巻：道徳論の体系1812年』（訳書、哲書房）など、平成21年度中に14冊の著書・訳書を出版した。

<特筆すべき社会貢献活動等>

(1)文学研究科の独自企画、あるいは他部局や県、市町村と共催で、以下のような市民向け講演会や講座を実施し、多くの参加者を得た。①有備館講座第8期「学問の楽しさ」（宮城県大崎市岩出山、平成21年5月～9月）と②齋理蔵の講座第2期（宮城県丸森町、平成21年6月～10月）を継続して開催した。③11月3日、植物園と共催で市民オープンキャンパス「紅葉の賀」を開催し、植物園での野点、ガイド付き散策、尺八野外演奏、俳句の会、佐伯一麦氏の講演「漱石の手紙から一私の文学雑感」などを行い、延べ400名以上の市民の参加を得た。④みやぎ県民大学大学・東北大学文学研究科県民講座「人間理解の方法論：文・史・哲・心、それぞれの流儀」と題し、9月14日～19日まで6回の講義を行った。⑤11月14日、東北文化研究室主催の東北文化シンポジウム「死を見つめる心：現代東北の葬送文化」を開催した。

(2)「第3回青春のエッセー：阿部次郎記念賞」を選定し、平成21年11月3日の市民オープンキャンパス「紅葉の賀」に合わせて受賞者を招待して表彰式を行った。平成22年5月に入賞作品集を刊行したところ、上毛新聞コラム「三山春秋」、中日新聞コラム「中日春秋」、東奥日報コラム「天地人」に取り上げられ、優秀作品が広く紹介された。

(3)生涯学習の促進に寄与する教養書として、「人文社会科学講演シリーズ」の第4巻『東北人の自画像』（三浦教授編）、新たにスタートした「人文社会科学ライブラリー」の第1巻として『謝罪の研究：釈明の心理とはたらき』（大淵教授著）を東北大学出版会より出版した。

(4)文系振興のための「コラボレーションオフィス」を文系部局共同で東北アジア研究センターに設置し、同運営委員会の審議に基づき、文系サイエンスカフェ「東北大学リベラルアーツサロン」の3回の開催に協力した。

(5)文学研究科教員は、国、地方公共団体、NPO、マスメディアなど外部機関に対して積極的に協力している。日本史・今泉教授、考古学・阿子島教授、東洋日本美術史・長岡教授、泉教授などが文化庁、宮城県、仙台市などにおいて文化財関連の多くの委員会で委員を、社会学・長谷川教授は環境省、宮城県、仙台市などで地球温暖化やエネルギー問題関連の委員会委員を務めている。その他、心理学・仁平教授はNPO法人「ワンダーポケット」の理事、日本文学・佐藤伸宏教授は仙台文学館運営協議会会長、国語学・小林教授はKHB東日本放送「週刊ことばマガジン」監修、美学西洋美術史・芳賀准教授は国立西洋美術館の展覧会カタログ『古代ローマ帝国の遺産』の監修、社会学・長谷川教授はTV選挙報道において解説を行った。